

令和7年度学校自主研修事業 (地域に開かれた高等学校魅力化事業)

視察報告書

栃木県立益子芳星高等学校・福島県立猪苗代高等学校 地域連携型探究学習の取組に学ぶ

2025

11

20~21

はじめに

本報告書は、令和7年11月20日および21日に実施した栃木県立益子芳星高等学校ならびに福島県立猪苗代高等学校の視察を踏まえ、両校の地域連携型探究学習の取組を整理し、本校における探究・地域協働の今後の方向性について考察したものである。

両校はともに小規模校でありながら、地域と深く連携した特色ある探究活動を展開し、生徒の主体性や社会性を高める教育を実践している。本校においても、地域に根ざした学びをどのように育てていくかは重要な課題であり、「持続可能な探究体制の構築」「外部人材との連携」「地域との共創文化の醸成」という観点で大きな示唆を得る視察となった。

 <p>協働体制の制度化 (Institutionalized Collaboration)</p> <p>地域連携が特定の教員の善意や努力に依存せず、学校・行政の「仕組み」として組み込まれている。</p>	 <p>外部人材の力の活用 (Leveraging External Talent)</p> <p>コーディネーターや専門家など、外部の「プロ」が関わることで、教員の負担を軽減し、学びの質を高めている。</p>
 <p>小規模校の強みの最大化 (Maximizing Small School Strengths)</p> <p>生徒一人ひとりへの丁寧な支援、学年を超えた交流、学校全体での意思決定の速さなどを強みとしている。</p>	 <p>失敗を許容する文化 (A Culture that Accepts Failure)</p> <p>生徒が安心して挑戦し、試行錯誤から学べる心理的安全性が、探究活動の質を支える土台となっている。</p>

栃木県立益子芳星高等学校



(1) 学校の特徴

益子芳星高校は、陶芸文化が息づく益子町に所在し、普通科内に6つの専門コース（進学・保育・デザイン・食物調理・ビジネス・情報スポーツ）を設置している。生徒は地元だけでなく近隣市町からも通学しており、多様な学習ニーズに応えた教育がなされている。教員が丁寧に寄り添い、生徒の自己肯定感を高める環境づくりが重視されている。また、校長先生が冒頭で示したスクールミッション「地域を支える人材を育てる」は学校全体に浸透しており、探究活動の根幹を形作っていた。

(2) 地域連携の体制

益子芳星高校では、地域行政との連携が制度として確立している。

- ・町の生涯学習課職員が定期的に来校し、講座設計や調整を担当
- ・講師依頼、材料費、謝金を町が予算化し、学校負担を軽減
- ・地域学校協働活動推進員（地域連携コーディネーター）を配置
- ・一年生の地域巡検では町がバスの手配を協力するなど具体的支援がある
- ・町民大学（現「ましこ未来大学」）と学校探究が完全接続

行政・学校・地域が一体となり、学びを支える基盤が整備されていた。

(3) 探究活動「ましこ未来大学」の構造

探究活動は段階的に体系化されている。

1年：地域を知る

自己のキャリアモデルとなる地域の大人との交流を通して、自分の住む地域への興味・関心などを高める

2年：コース別探究

3年：選択探究（個人テーマで地域へ提案）

地域理解 → 協働実践 → 自走的探究という流れが明確で、学習の一貫性が保たれていた。

ましこ未来大学：行政と学校がつながる探究学習のカタチ



(4) 生徒と教員の姿容

- ・生徒が挑戦に前向きになり、自己肯定感が向上
- ・コーディネーター（社会教育主事資格保持）が教員の「困り感」を受けとめ、資料整備や調整を担うことで校内の信頼関係が醸成
- ・行政・教員・地域が生徒の学びを肯定する文化が形成されていた。

さらに、益子芳星高校では地域連携・協働に関する年間活動一覧を作成しており、外部連携を「見える化」していた点も本校にとって大きな学びであった。

福島県立猪苗代高等学校



(1) 学校の特徴

猪苗代湖の湖畔に位置する全校50名規模の小規模校である。教員と生徒の距離が近く、互いをよく理解した温かい学校文化がある。部活動が少ないこともあり、学校全体が探究に振り切った体制を取れている点が特徴的であった。



(2) 探究学習「猪苗代学」の理念

猪苗代学を支える根本は「失敗を許容し、再挑戦を肯定する文化」である。校長先生が日常的にこの理念を語り続け、教員も生徒も同じ価値観を共有していた。

(3) 探究の体系

1年：地域理解（農業・観光・防災）

2年：ゼミ制探究

（専門家が毎週伴走：蕎麦・ウチダザリガニ・菱・アート等）

3年：個人テーマによる研究（商品開発・地域提案など）

地域資源に根ざした多様な学びが展開され、生徒は興味関心を軸に深く探究していた。

(4) 地域専門家による支援体制

県の制度により7名の特別非常勤講師を配置。農家、議員、蕎麦職人、アーティストなど多様な外部人材が学校に入り、探究を学校外につなぐ役割を果たしていた。

(5) 生徒の変容

・「伝えたい」という衝動を持って他学年や来校者を呼びに来る生徒の姿

・地域住民が400名規模で発表を聴きに来る成熟した発表会

・生徒の素直さ、自分の言葉で語る力、挑戦を楽しむ姿が印象的

猪苗代高校は、挑戦と失敗を真正面から受け止め、成長へ導く学校文化が確立していた。

「やりたい」から生まれるユニークな実践と地域からの喝采



ザリガニ班 (Crayfish Team)

磐梯山の湖に生息する外来種ウチダザリガニを、駆除するだけでなく有効活用。殻を粉末にした調味料「ザリ塩」を開発し、テレビ番組でも紹介される。



蕎麦班 (Soba Team)

NHKの料理対決番組に出場。ザリガニ班と連携し「マラー タン味のザリガニそば」を考案し、見事優勝。

学びの収穫祭 (Learning Harvest Festival)

年間の成果発表会には地域住民ら約400名が来場。生徒の活動が地域の誇りとなり、大人同士の交流も生み出している。

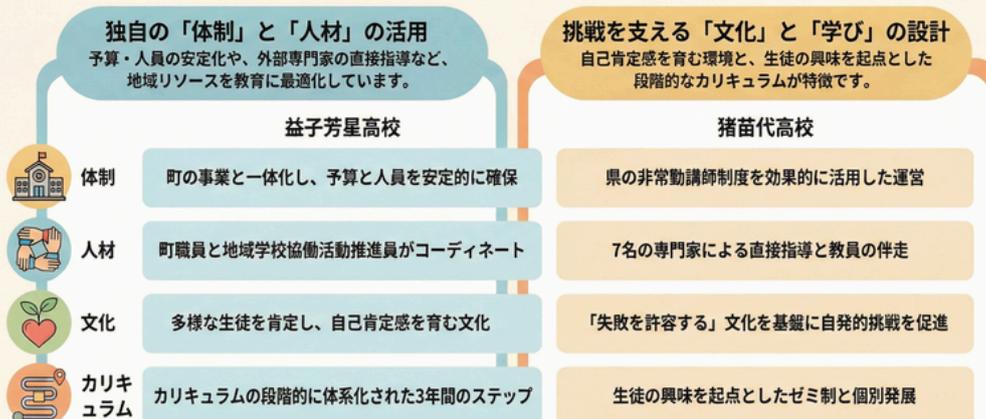
2校の比較と共通点

視察を通して把握された両校の実践を踏まえると、本校が今後目指すべき生徒像として、次のような方向性が抽出できる。すなわち、地域社会の一員としての自覚を持ち、地域資源や取り組みに誇りを抱きながら、周囲との協働関係の中で信頼を獲得し、失敗を成長の契機として再挑戦へとつなげる主体的な態度を涵養することである。この姿は、地域に支えられ、かつ地域を支える存在としての高校生の在り方を示しており、益子芳星高校および猪苗代高校に共通して確認された特徴と整合するものである。

- (1) 地域との協働体制が制度化されている
- (2) 外部人材の力を効果的に取り入れている
- (3) 小規模校の強みを最大限活かしている
- (4) “失敗を価値に変える文化”が探究を支えている
- (5) 行政・地域が学校に投資し、支える姿勢がある

地域と歩む、新しい教育のカたち：益子芳星高校と猪苗代高校の挑戦

栃木県の益子芳星高校と福島県の猪苗代高校は、それぞれ異なるアプローチで地域と連携した教育を実践しています。両校の「体制・人材・文化・カリキュラム」を整理し、それぞれの強みを可視化します。



考察

両校に共通して観察された教育文化の構造

今回の視察を通して明らかになったのは、益子芳星高校と猪苗代高校の探究活動が、単なる地域学習や体験活動の域を超え、学校文化そのものに深く根ざした“教育生態系”として成立している点である。その核心は以下の3点に整理できる。

(1) 誇り (Pride) : 地域を支える人材としての自覚

両校は「地域を支える人材を育てる」というミッションを明示し、それが探究全体の核として機能していた。生徒は地域の大人と協働する中で、自分の学びが社会に役立つ実感を得ており、これが主体性の源泉となっている。

(2) 愛される (Belonging) : 対話と関係性を基盤とする安心感

行政職員・専門家・地域住民が学校へ日常的に出入りし、生徒の挑戦と失敗を温かく受け止める関係性が成立していた。心理的安全性が確保されているため、生徒は自分の探究を自分の言葉で語り、他者に届けたいという動機を自然に持つようになる。

(3) 失敗を価値に、挑戦を文化に (Challenge)

猪苗代高校では校長が“失敗は価値である”と繰り返し語り、益子芳星高校でも提案より実践を重視する姿勢が徹底されていた。制度（推進員、特別非常勤講師、町の予算措置）と文化（否定せず伴走する姿勢）が重なり合い、生徒は「やってみること」を前提とした学びを体験していた。

これら3点は単なる理念ではなく、制度・文化・実践が相互に作用して成立している教育文化である。本校が探究を再構築する際にも重要な視座になると考えられる。

視察後の取り組み

本校では、今回の視察で得られた学びを学校全体で共有し、今後の探究活動や学校づくりに生かしていくため、視察後速やかに複数の取組を実施した。

まず、視察終了後すぐに、視察内容を整理した「視察報告速報」をスライド資料として作成し、校内で共有した。現地での気づきや印象、両校の探究体制や教育文化の特徴を簡潔にまとめることで、視察の要点を共有できるよう工夫した。その後、職員会議の場において正式な視察報告を行い、全教職員を対象に、両校の実践から得られた示唆や、本校にとっての課題意識について共有を図った。これにより、探究活動や地域連携を一部の担当者だけでなく、学校全体の課題として捉える共通認識を形成することができた。

さらに、視察を契機として、教員ミニ研修「ゆるっと学び session」を実施した。本研修では、「視察報告をヒントに、本校の探究の今とこれからを考える」をテーマに掲げ、有志の教員が参加し、対話を中心とした意見交換を行った。研修では、本校における探究活動の現状や課題の整理に加え、今後目指すべき探究のビジョン、本校らしい探究の在り方、さらには探究活動のネーミングの工夫や、町内の異校種との連携の可能性についても話題が広がった。

参加した教員からは、「本校では探究活動を通じて生徒にどんな力をつけさせたいのか」「探究を学校文化として根づかせるためには、教員間の対話の場が不可欠である」といった意見が出され、視察で得た学びを本校の文脈に引き寄せて考える姿勢が共有された。



おわりに

今回の視察を通し、本校が目指すべき姿が一層明確になった。地域とともに歩み、挑戦と再挑戦を肯定し、生徒の成長を地域が共に見守る学校文化一。

益子芳星高校と猪苗代高校の実践は、この未来像が決して遠い理想ではないことを示している。本校においても、これらの示唆をもとに、地域と共創する探究の在り方を模索し、生徒の学びが未来へひらけていく学校づくりを進めていきたい。

